

## 参考文献

### 『大西民子全歌集』

大西民子/著 現代短歌社 2013年

### 『自選100歌選 大西民子集』

大西民子/著 牧羊社 1986年

### 『まぼろしは見えなかった』

さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年

### 『大西民子講演録 現代の短歌について』

大西民子/著 岩手復興書店 2016年

### 『無告のうた 歌人・大西民子の生涯』

川村杏平/著 角川学芸出版 2009年

### 『大西民子 歳月の贈り物』

田中あさひ/著 短歌研究会 2015年

「盛岡市ホームページ」

<http://www.city.morioka.iwate.jp/index.html>

\*「おおみやデジタル文学館—歌人・大西民子—」

大西民子さんの詳しい情報をご覧ください

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJS02U/1110015100>

2019.7.16 発行

さいたま市立大宮図書館

さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1

電話 048-643-3701

## 企画展 大西民子とふるさと岩手

1~4	写真(複製)「幼少期の民子」「父・佐介」「母・カネ」「妹・佐代子」
5	『夏季休暇日誌』
6	『城南尋常小学校卒業記念誌』
7	雑誌「歌と随筆」
8	原稿「両肩を ショールにくるみ 眠る夜々 帰って住まむ ふるさともなし」
9	原稿「アンダルシアの 野とも岩手の 野とも知れず ジブシーは彷徨ひ ゆけりわが夢に」
10	原稿「たれよりも しあわせにならむと 言はれみき 故郷を出でて 三十年たつ」
11	原稿「獅子舞の 笛をラジオに 聞きしより 故郷の雪の 山々浮かぶ」
12	原稿「みちのくの 訛りある声 後方に しておしがバスは トンネルに入る」
13	原稿「いづこにも 富士はありとも ふるさとに 裾野ひろぐる 南部片富士」
14	色紙「きららかに ついばむ鳥の 去りあと 長くかかりて 水はしづまる」

## 常設展 大西民子の生い立ち

1	民子、学生時代の手作り歌集『むろ咲きの菜種の花の』
2	原稿「バス降りて 十字路よぎり 来る君よ 夕陽の中の われに手あげて」
3	原稿「うつし世の 最後の逢ひと 思ふ日に 人は喚きつ われを詰りて」
4	短冊「鎮まらぬ ころのごとく 夜もすがら 風を集めて 鳴る梢あり」
5	民子が愛用していた眼鏡とケース

## 民子と家族

大西民子は1924(大正13)年の5月8日、盛岡市八幡町<sup>はちまん</sup>にて、刑事をしていた父・菅野佐介<sup>かんの</sup>と母・カネの次女として生まれました。

父親の佐介は敏腕刑事として有名で、職場では恐れられていた一方、家庭では子煩悩で、姉妹の中でも特に民子は父親から可愛がられていたと後に語っています。

母親のカネは社交はあまり好まない性格だったとの事ですが、近所の人々の面倒もよく見ており頼られる存在だったそうです。

次女だった民子には姉のサト、そして妹の佐代子<sup>きよこ</sup>がいました。9つ年上だった姉のサトは幼い民子に、小川未明<sup>おがわみめい</sup>の童話『赤い蠟燭と人魚』を読み聞かせてくれて。いつも人魚の娘が売られてしまう場面で必ず泣いてしまう民子に困ったサトは、「泣くからダメ」と読むことを拒むので、「今度こそ泣かないから」と約束して読んでもらうのに、毎回泣いてしまった思い出を民子は随筆に書いています。

一方、民子の8つ年下だった妹の佐代子は、幼い頃とても甘えん坊だったそうで。ある日、妹をからかってみたくなった民子が「あなたは、どんぶらこって蜜柑箱で流されてきたのよ」と本当の姉妹ではないという嘘を言ったところ、本気にとらえた佐代子は泣き出してしまい。母と姉、仕事から帰ってきた父の3人から本気で怒られてしまったエピソードも民子は書いています。

暖かい家族に囲まれた民子は、冬になれば妹とスキーやスケートをし、夜には炬燵で家族と押し合いながら座り、団欒のひとときを楽しんだり、岩手でめぐまれた幼少期を過ごしました。

## ふるさと岩手

自分と同じ教員だった大西博と結婚し、子供も授かった民子でしたが24歳の時に死産により我が子を亡くしてしまいます。

岩手から大宮に移り住み仕事に打ち込みながら、歌人・木俣修への入門を許された民子は、しだいに歌人としての頭角を現しはじめました。

しかし、私生活では夫と別居を経て1964(昭和39)年に離婚。すでに、最愛の父と母も亡くなっており、優しくした姉のサトも23歳の若さで亡くなっていました。唯一残された肉親であり、一緒に大宮で暮らしていた佐代子も40歳で亡くなり、民子は48歳で家族を失ってしまいます。

こういった辛い経験を踏まえてか、中期の頃までの民子の歌集の岩手の歌は「自分にはもう帰る場所がない」というイメージを読み手に感じさせるものが多いです。

ところが、後期の歌集になるにつれ故郷を懐かしむ歌がみられるようになっていき、民子自身による最後の歌集『風の曼陀羅』では、のびのびと故郷を詠んでいます。

大宮に来てから、ほとんど岩手に帰らなかった民子ですが、1985(昭和60)年、61歳の時母校の岩手県立盛岡第二高校(旧・盛岡高等女学校)で3月7日に開かれた卒業式の講演に招かれます。「女学校の頃口ずさんでいた、校歌(雪間に匂う白梅の清き操はその心)このひと節に、どんなに励まされ続けてきた歳月だったろう。女学校時代に、何気なく教わっていたこと、そういうことが人生の支えになって励ますことが、あるものですね」と岩手での思い出がいつも自分を支えてくれたことを生徒たちに語りました。



©仲佳